俊寛島物語

三下之巻

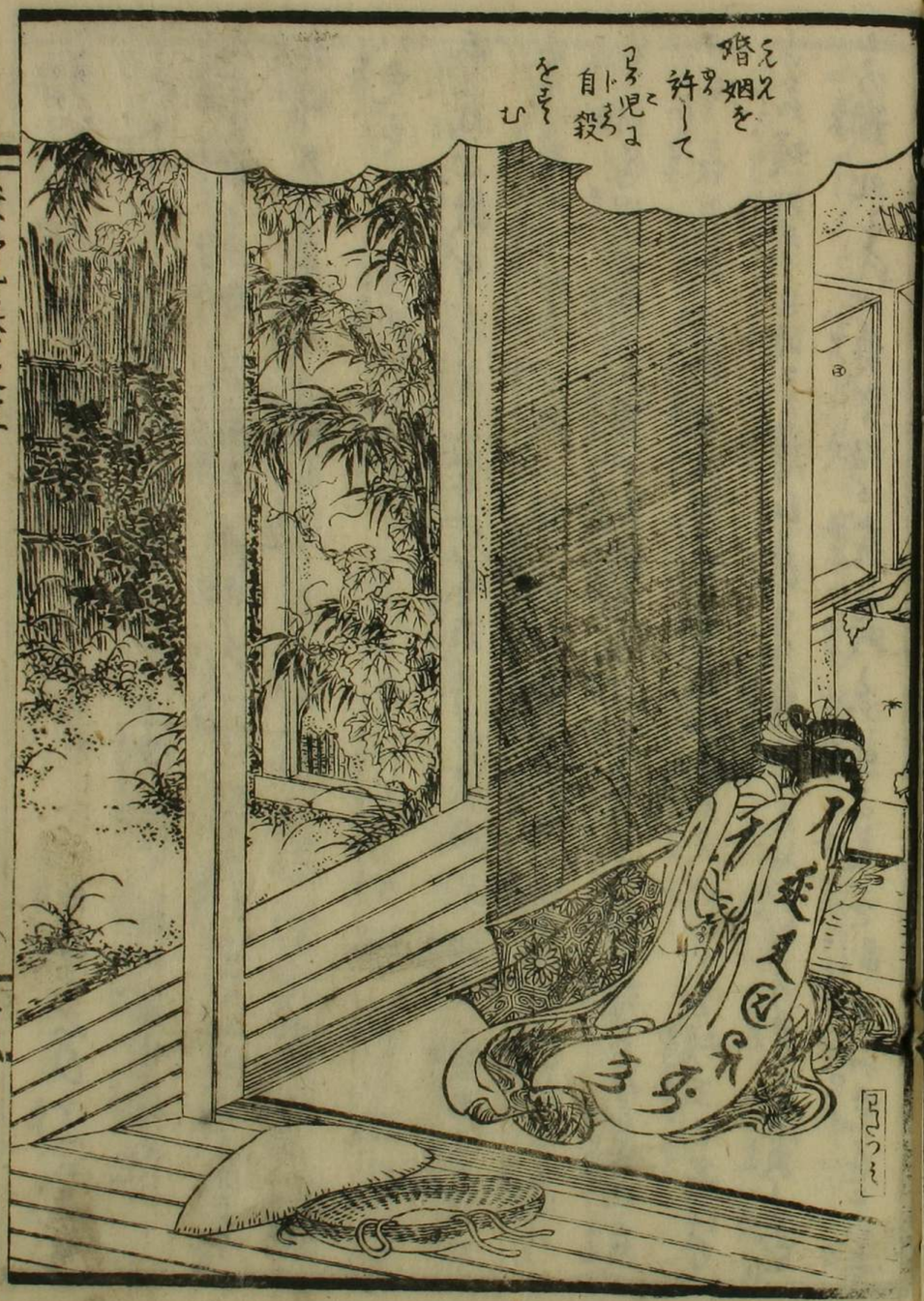
へ13
1304
4

1304
4

悲悲。冥利もさぞかしあるらしく渡海は亀王と面をあらしく忙ぜうり。
老て物ふ急へしく。何とも叶えざるは早しかしぞや。こぶ子は又何とぞ。
こもかしも疲しかへと問こもいや苦しくるどて推辞仕るべき。便る迷ひ
人なくなるぞ。浅ましるる私心隈るく。こせよかせよと教ゆるぞ。孝行さ
弘竭ぞこも。火打水汲薪携り。若し迷所為も何ら厭ん。一日るのりとも
亀王ぬしを夫といはせてもひね。といひうけてこんくとば。亀王は咬しに紛
うし。文の仰あいゆども。主君孤嶋を痛せとは夫人孺君のあん往方ぞよ
ちらぞ。君恥めらるとは。臣死とといへ。孝文もあるものを。只今妻と
娶アそへ。といへ袖をひく渡海を尻目ふかけて三郎は。顧ぜうと打笑ひ。
やよ亀王汝賢しげあいいくどそへ拘子実紀るり。孝子の門あへ吹ぜ
忠臣を生ぜとといり。只一夜の流臥るりとも。汝渡海と婚姻せば。こぶ為

あん老子婦あり。女児とぞくがいもかりぞ。汝らその妻をりく。老ようあ親よ。冊ようとりあん老孝あり。ちうしと後主の往方を尋めぐりあん老ちこ。忠孝両ぞのぐ〳〵全せんあん。又此女子を要ふまりぞ。かくん縁しを結ん弱。今霄ぞ黄道吉日ある。つぶ窠酒ふと貯しる一瓢の酒もあり。氷人ふも阿翁ふも。ふりる男の三郎が。齢ようぞ〳〵亀王よ。名ふ〳〵員ぞ千代萬代も。妹夫の契ふりりそ。とりん諭〳〵煤びしる。黛攫ぞ納戸へと。ぞく後影を渡海へ。ぞくそ〳〵び伏拜ぞ。紫ぞるより右ぞふ安く。今霄篝ぞふ行さんく。世間廣く妻と味ぞ。夫と齊眉喜〳〵さぞ。てぞも恨ぞ〳〵産灵ふ面目もある紀刃の僥倖。これも篝ぞこの慈悲ぞ〳〵。飲び〳〵ハあんさぞやとぞ。ぞ慈ぞ亀王へ。脅を曝ぞくさう侍きおん沈ぞく嘆息の呼吸ともふ納戸より。又三郎ハ声高く。

翠帳紅閨萬事之禮法雖異編蓬白屋一生之歡會是同。　ニ朗詠〳〵。葛の襟もをりめ正く。あび〳〵る小四方を捧りちぞ。徐ゆふ岩ぞりで。夫婦が間ふうをを。ぞん老ぞ千年を壽ぞの。土器ある〳〵ぞ妹と夫が命を縮る短刀ぞ。海ふ。ぞんのふぞ〳〵。受情極め〳〵分も今ぞ〳〵ふ。ぞひがけねばいとぞう。折登ぞを亀王ぞ八目をりく諭ぞが又三郎。優然形をめ〳〵あく。ゆをれ亀王。渡海もよく笑さあ〳〵へ。仁義礼智忠信孝悌の八のりのん。人間一生涯の守本尊。りぞの一ぞうとも缺ぞんぞ。終ふ世る主ぞを外ぞ。ぞふ。ぞんぞ〳〵ぞ。汝女ぞふ魂を奪れ。主の要金を遣ひ失ひ刹君家滅亡の日ふ来ぞめんぞ。女性幼君のぞん往方ぞふ〳〵ぞて門容ぞと主張りぞ。ぞれぞめより汝ホが。言語の間ふく猜〳〵


えゝ婚姻を許して
子児は自殺をせむ

なり。かゝれバ犬自物なれど。其のおや死なバともに一死んと思ひ定めても。
それも女々しく思ふなれバ汝渡海を携来て。親の家を踏あらし。
六十に餘る三郎を虐気なのみならず傷りかざり。おのれよくハあぢりしそ。
夫婦なるとも子又が臑を齧らんと計較する不孝不忠をよし親
ハ免さんとも。皇天いかでか許しなるべき。それハ村語に老朽て。聖の数ハしるも
しらねど教ぞしく子に孝行を求るものゝ中に。汝を亀王と名づけ
しかれバ亀の一名を玄武と稱ぞ。其の形譬バ武士の甲よろふが如し。故に亀乃
全身を甲と号く。甲ハ則鎧なり。六を蔵して物に傷られず。天地と共
に命長られとて。その名を付ぞやある。又次男を蟻王と名づけ
られし蟻ハ義をしるて勇むなり。食あるを見てハ獨り是を貪らず。
其の類死すれバ屍をなぞ蟻塚に。虫に義を副られバ是をその名

に表せしぞ。されバ兄弟に稚きより物読し。手習し。撃剣拳法も人
なみに教よ行の為ぞ。小耳に挟し忠孝の道踏迷て借金の淵に
はまりし泥亀の泥もて親の面を汚を。白徒になるならんれど。ぬゝ一
代領地ハ永代寺の水江て法勝寺に属られしまゝ。俊寛僧都ハわが
為に主君とするもあらねど。汝ホ兄弟を進らせより子のごとく
愛せし慈愛の有がたく。恭さハ後の領主の民とろめ
なるぞ。これさへ既に知ものぞし。汝ホハ恩顧のものなり。倘
恩をしらバ揚貴妃小町に恋するとも。恥じとあべきことなりける。恥を
が自殺せよ。其の中の腐ハ。猿・獺除されバ後に愈ぞので改悟して
殺さんぞと刀突立居丈高く。老の怒の烈しさに。渡海はぞ悲しくて。
亀王ぬすに料ハなし。縁故ハまどかに侍りぞ。そのかん怒を其一つよいひ

とくとも哭ぶるべし。只前世の悪縁と思ひくゝ是まぞのおん憤を未期の水よりも流しくゝろよく。夫婦ともろとも殺しくゝべと矛を投ふくゝ泣よりも。亀王いとをそれ入く。額の汗を膝よりけさゝ。又よ對くゝ

ゝくゝ。鹿を逐ふ獵夫山をえぞと恋暮の凝情よ忠孝をおもひ忘まゝ過を改ざる悔ふ又を忻るともおぼさんが女子と共よ情死して。

ゝ見後よ。ゝ人よりゝれ。親同胞よ面目を失ふせんい亀王が。志よゆゝねど。いくゝ渡海よ泣喞れ。己ゝを弱ど扨くゝゝ。外ゝ最期の暇をおくうゝせんとくゝ罪を倍がひとくゝゝるぶいくゝゝ。ゆる日波の大渡ふくゝ。才蛾王よ環會ゝ。彼ふくゝ罵耻めゝ辺。案の前に釈子の在処も沼問ど。さんど恙ゝ。坐ゝるゝゝ。彼が執初へゝゝゝゝ。ゝりな。世ゝ捨ねども世よ捨ゝ。狼狽めを子ゝんがゝゝ。釈ゝんべ

ゝゝ。自殺をゝめくゝ老の手づゝ。双潜くゝゝゝゝ。その慈のゝゝを負ふ。重を罪科をゝふせん。ゝよ渡海。覚弘究くゝゝ。ゝよ今ゝゝ歎くゝゝと尻目ふかけゝゝ。励し。押肌脱が強惟子。六字の名号墨黒ふ。口ふも唱る渡海が。携る袂をゝゝ排ひ。小四方ゝゝ戴き。短刀をゝゝと抜放くゝ。又ふめくゝ竹箆ゝゝ。ゝゝ不雲。と亀王ゝ渡海と目を見めゝ。呆ゝ。ゝ冷咲ひ。亀王それを何ゝゝ。夫剣ゝ人を斬。その矛を傷るゝのよゝゝど。君子ゝを帯ゝ。矛の衛ゝ。英雄ゝゝとをゝく國を治ゝ。又ふ似ゝる竹箆ゝ。逆の刑具ゝる。竹据ゝゝ等ゝ。科重ゝゝ腹切ゝふ。真剣を許ゝゝど扇をゝくゝゝゝふ捻ゝ。三郎が今竹刀を授ゝゝ。扇腹のゝゝゝ。汝がゝゝ白物ゝ腹切ゝゝを

ゝくゝゝくゝ。又が教くゝゝゝゝん。くせよゝ。ゝひもくゝど。刀ゝゝ。と

引抜つゝ腰へ突こゝ[illegible]。竹刀捨て渡海と。左右こう携留物あり犯ひ[illegible]。その何方の自殺ぞと涙ぐゝ[illegible]。何夫婦を。こゝこゝこゝ息を吻。付ものぞこゝ意も弱ぬ焼野の雉子夜の鶴牝を慕ひ雛を思ひ[illegible]。木石ふこれ[illegible]。除命ひく行もめらぬ三郎が。皺肝切て見よ代を。當珍罪い贖ふこう。ふうまそ夫婦のろとも。幼君女性のもん在処を索ぬ。失ひつる金銭逢しく。助當の勧解をせよ。罵厠せ[illegible]。子が可愛さ血気いまぐ実こゝ[illegible]。時ふい一下こびの恨いあるものをそ[illegible]。幷ふ弱幷されぬ義理こそ人の絆こゝ。嫁ひめこゝ変のひそと。いの声いとぐこゝ[illegible]。折こゝ集く虫の声庭の木そ[illegible]。渚行学常の数をひく。哀やまと初更種生平こう耳も改

て。亀王い拭ひめくぬ瞼ゑ絞る血の涙。嗚呼憐ゑ死後ゑ又の非命。つこれゆるゑと。ゆふこゝの子い牛裂ゑ。裂こゝとも罪科を。贖ふゑゆゑ。こゝぶべし。命ゑ代ゑゆゑる。慈悲いと深き恥をゆつ。過世いこゝる業因ぞと胸こゝ敲きく悔歎く。理こゝれが渡海も。こゝぞ歎ゑ嘆こゝれて。ゆこれべーと云こゝゆこゝが三國ゆこゝこゝもゆく。こゝなんゆのを思ひ一言。末期の暇おこゝさんとく。縛逆さまゆ完結の。火抱をこゝる古今意こゝ。月夜鳥も夫婦がこゝを。啼こゝのを思ひ付りしと。咲ひこゝ彼方此方こゝ。思ひ活ゑが三郎い。閉こゝる眼を開と睨こゝ。涙こゝ盃の後悔時こゝ程ゑ。こゝが一命い俊寛僧都の恩ゑ蒼ゆる義士の意地。後の領主の民こゝ。ゑ思ひ実めく捨こゝる子を。こゝ代こゝる孫こゝ。ゑ遺言を化みく。夫婦非命ゑ空くこゝ。こゝの親ゑ大死ゑ。

忠孝あり鶴人。人をも斬らんとすれども刃も傷ぬ。その竹刀を怨念に
なりひく。直なる竹のうろうく。今うそ許を妹夫の縁今宵ぞ結
ぶ三三九献も又い黄泉へ水盃別の櫛の歯を挽ごく。冥土の卯ひ
近つ死ぬ。ひつまぐう苦痛をさとる。其処故さどや。と焦燥く。右手の
膳へ引ぐ。を刀尖を又抜出し。振ん奉の宝めるく。吹うえうう悔よ。
倒ろく屍そ。血よ塗ま。目もめそうまぬ分野ろり。夫婦一度よ泣
叫び。室敷よろう著く。ひくようえ口続ど。田舎ん隣もいと遠く。
訪人けるえ夏の夜の喞ぐ。虫の音よ月魂ぬまが更闌ろう。
ろれ酉へと憑むるる又が亡骸ろうるめ。結且里人ま人よ苦ろう
ろう。形のぐく送葬ろう営ろ七七の追薦仏ろの。叮嚀ろりのしと度
ふ。亀王ハ渡海を伴ひく。故郷を立ろるれ彼此を徘徊しく。或ま

ハ夫人孺君の往方をそゝんとし。又めるゝをハ失ひる金を。調達
ちんとく。千こふ肺肘を摧ども。治業ぶるを退種人のその日をゝ
経営うねをバ。暇の金をそのゝべを。ゝゝぶいなるれど。又の遺言と
空〳〵ぢゝとく。夫婦送ふ志を励し。旅ゝう旅ゝ日をあくる花ゝ秋も
力をもなけく。治兼元年ハ暮ゝり。

第八套

抱首贈雙言ゝ　寃を雪ぐ　又ふ伏を　節婦案前の事

明ゝぢ治兼二年の春もるく。夏の季ゝう。徐ふハ中宮御産の祈
のりく。抑高倉院の中宮ゝ。入道相国清盛の女児ゝく。韋ハ徳子。安
徳天皇の国母ゝるゝ。後ゝ院号をり。建礼門院とまうせ
をゝり。懐妊のゝん悩。物の怪の正為ゝるんどまうゝもめんが。平
相国ハ道ゝ。何ぐゝ吾根を抜ぞゝく。鬼界嶋の流人丹波ゝ将

成経。平判官康頼を赦免ゝゝ急ぎ帰洛あるべしとく。今年七
月三ゝの白ふ山教書をのハし丹左衛門尉基安ゝ。難波三郎経房を
相副ゝく。彼嶋へ遣ゝり。さんバあるず罪ゝく。もるゞ嶋へ流されまゝ。俊寛
ゝゝ水ゝうゝるゝ。善改ゝめゝとく。小松内府ゝびく練めゝゝ
うゝ。平相国ハゝふゝふ。昔時の恨をゝひ忘ゝぞ。いゝ〳〵腰めゝく。俊ゝ
俊寛を召還さぞ。かく〳〵成経康頼ゝ九月下旬ゝ嶋を出つ。肥前国
加瀬荘ハ。成経の舅丹盛卿の所領ゝり〳〵ゝが。少将判官ハ。彼北ゝ
逗留〳〵く。その年を暮〳〵。治兼三年春二月ゝ。恙ゝく帰洛ゝ。と
風声隠ゝゝり〳〵狂ゝ。執ゝの夫人案の前ハ。俊寛ゝゝみゝりゝを。赦ふ
偏ゝゝりゝとハゝりゝぞ。鶴の前徳壽丸ゝりゝとゝふ。けゝと暮〳〵。ゝと
祐ゝびゝふゝぞ。貪慾邪慳の案山四郎ゝ。俊寛ゝ洛〳〵く。舊のごく

ふ發途のあが。過分の恩賞ありがたやと涙ふ者ふたれを歎び。
いろく信ゆふ曾待ろ。ゆくく鬼畏嶋の流人ホ翌去ハ俗をと受え
しうが。案の前ハ。めをりの喜しをふ。その夜ハいも寝ようまで。蛾王安良
子ハ寛ふゆう。執行ハ今年耳憂を嶋ふ拾ようまで。吸京しをハ。
居つ待んハらびしうべし。子どもらもいくが宇治ぐぞ俱しくもけ
かと仰まが。蛾王答く。仰理ハ学んは。某殿君のあん供しく。翌ま
ほとえく。鳥羽までも参りあひなるべうあひはしが。女性の出迎へ
あんま。既次の祝も便す。見物の老弱ハ首彼首ハ群集せん欲。
あるべくん。そあく待ひてんやとうをふ案の前微笑く。執行の
嶋ふ在る祝ハ叶をも悼うつ。既ハ免さんく及りあくば。既次の狼
藉めべうをぞ。汝がりハ而。慮ハ過ようを出迎ざんぞ礼るべ。

いろくあけう。と寛ハ黙止ぶく。男姑ハ縁由を告く。蛾王夫婦。
結且ぶをハ三人の主を扶掖る。その日ハ東寺の四塚ハ一宿し。次且宇
治の泊りまでいをく。女許引入まる芝生の松が枝ハ齋しを破
幕を結び著主従項を長くし。今ようと待ほる。午の貝吹比
及ハ轎二挾遣ハ人も。治の親族出めひぬ。と驚しく。人夫後方
先方ハあさがり。ちん発ようめこく。蛾王忙しく出て誰と問ふ。
丹彼女將と。平判官の後治しをうりと答ふ。ちくば法彼寺の後
ハへ後れ見りを。問ハ。ある人かゆもちくとハ。と弼しんべいさぐ
ふ遣りをつ。且しく又一挾の轎を先ふ舁し。六波羅の侍。丹左衛つ
尉基安。馬上ゆく出ぬまり。問ハまでもるくを。と案の前狀
子ハ。安良子ハ幕ようを揚さく。待ゆふ。間近くりぬ當下蛾

王は轎の左手に立る。若黨が袖を引く。見れば俊寛僧都の夫人
二人の御子達を招く。出迎へ来るるぞ。僧都は如何にまし〳〵と礼儀
を正しく速なれば。かの轎を。幕帷の内へ入れ奉る。めなれつゝ。と
ばかりあり。親子三人走り寄る。忙しく轎の戸を引開れば。俊寛は
難波三郎 経房。裡より案の前の手を引かるゝ。出でゝ立出でゝ冷
笑ひ獣を捕へ陷穽をかまへくし。魚を殉るあれば蚯蚓をかけそなへ
いぬる年より。平相國の仰を稟受け案の前の往方を雲のゆ絶て
その在処をかくせど。よりて此度成経 康頼 帰洛の叙は。俊寛もかゝ
ともあれ還らと風声さへ。絶て出でもとゝはざるや。とゝは主従こそ
驚き蛾王矢庭は経房を。押へ退つ夫人を後方は立て〳〵油断
せど。安良子は鶴の前と。德壽丸は引ぶく。裏胸を刺貫るや。難

波は左右より打もかゝらば。あゝ〳〵と立ち居る。浩 知は丹左衛門
尉基安は。馬をうちはけく。引とゝ立。准后の床几をとりて従者
ホホ。ホホ。吾侍両人は且くこの処に所要あり。汝ホは彼処に
等院ふ出たく。割籠を開き。放ふ休足せよ。そこくとゝそぶーとゝれが。
らけ。ゆるりつと意〳〵。基安が奴隷は。馬を樹の下に繋ぎ。抹を飼ひ。
経房が奴隷ホは轎を擡起し。打つ〳〵ちらく平等院へ去ぬ。基安
を目送りて。案の前主従は対ひ俊寛帰洛と笑へ程よ。そこ〳〵まち
ひ。もれども俊寛僧都は。年来相國の憎を受ける所を
をりく。嶋に送られしと。と説示せば。親子主従は物めくば。こゝ
そもいつぞと疑ひ惑ひ。〳〵と一度ふ注沈む。難波三郎これを見て。嘲
うち笑ひ。さて〳〵汝は偽ものべんがの。詳に説あらん。

當初平相國案の前を懸想しありきまうふ。朱雀院を進まんず。
却俊寛ゑ妻しる。そのゐん憤絶ゑそけど。経房仰をうけまう。
去ゝ年の秋成親卿を配所ゑ殺しう。その比俊寛も殺さるべうけ。
道遥ゐれば且くられを放しあゐ。去年の秋成経康頼赦免ゐ
ゐん使を命ぜゝ是。ゐれ丹左衛門とゐもあ。鬼界嶋ゑ行きたる。この
便宜をうく。俊寛を。千尋の水底へ推投め。閻王宮ゐ召渡さしう。
そもゝ〳〵ゐも再會ゐ嘆ゐ。俊寛を慕んゝ。志を改めく。平相國へ
参りうゐ。鶴の前ハさゝゐり。孩児穂壽が命を助けゐんとく。
彼義朝が愛妾。常盤が心操ゐ倣ひるべ。松ゑ常盤のきゐえく。
久後愛しく栄ゐん。志をうゝく子を叡さとも。参りうゝこゝゐの紅僥
袖を引んとも。ゐゐ実めく回答せよといハせもめくど蛾王ハ主君の

仇人脱さうど。と捧ゐうべゝ立ゐ。基安急ゐ抑隅尾籠の壯佼
狼狽ゐる。怒を強めゝ。基安が。のひゐゐるゐてめれとゐ参れ
ゝ蛾王ハ。歯を切りくつゐゐゐ。嶋ゐく足いゐゐゐれ。と叫く同
胞ハ夢の中ゐ。愛ゐるゐく牙を震ゝ。泣んとゐゐ声出ゐど。脅ゐん拒ゐ
安良子ゐ。安ゐゐぬ牙の物ゐ。慰めゐねゝ袖の雫。共ゐ消ぬべ紅
紅稽せゐ。案の前ハゐゐゐゐ。絶ゐ月を載ひゐ。経房ゑ對ひ。相國
の麗簡ゐどゐゐゐ。北年近ゐ昔ゐゐ。ゐうねくゐゐゝ来ゐ。
一旦ゐゐゝけゐゐを。非ゑ果ゐんゐくゐゐゝ。子どもらゐゐ不便ゐ。
三十ゐめゐる野中の松。ゐも実めゐゐを嬲ひゐゐゐ。仰ゐを
悔ゐ泣ゐゐ。滅ゝゐゐゐゐゐゐゐを。経房ゐく床几をゐゐゐ。三十
八遥ゑゐゐゐ。爾ゐゐも平魚。義女ハ夫女。ゐの母ゐのゐゐ。遠めゐ。

経房を刺して
節婦自殺せ
るのまへ
とく助丸
やすなり
あり王
ゆきまさ
まつのうら
ろくすけ

領、猪のしゝ相國も。さこそ欲しがりたまへども。平家うなく。とのひうけて。
歩みよりて油斷なきぞ。案の前に経房が。刀を閃と拔くさま。
瞻ぐさと刺さんと。倒るゝを素蒐うて。赤胸さを刺んとする
に。経房もあぢなる剛胆なれば。案の前の辟月を。楚と把て刀を遮
忽地に反て。蛾王にとらせめかく。難波が頸髻をひき組。仰さま
に捻挫び。女ながらも念力の。巖も徹を怨の刀尖。三刀四刀刺ほどに。
難波が稚く息絶ぬ。鮮血溢て屍のうへに。案の前が尻うちうけ。
おのれ奴を。咒ふ。項へつゝぬを伏のうめ。痛さ。と鶴の前。德
壽安良子。ものもいはで。走りつゝ抱き紀ふ。案の前が深疵を
どっ灸所を蠲て。緯斷まぢ。二人の子どもを。走りて。ものもいはで
ものゝ。ぐれば。漬る血と。涌て。涙は是悪きぞ。」蛾王も。掖ぐて。

ぬ。ひとうぐらさまぐよ。ぬぐりうい驚るぬぞ。丹左清つ尉基安が。倩軍の紂く
を助けぞ。るる母床几に尻をうけ。ほを又ぬつ。この景迹をうて嘆息
し。案の前に對ひて。いかゆう夫人の養父成親卿を。紂る難波を刺留
ぬ。武士もなぞぬ奇特の挙動。飽まで時めく平相國のおん威勢
を。ぬうんとせられる。俊寛僧都の志は。ぬらぞこの経房が。その人と
るる。ぬ経遠は等しく。奸邪ぬとく紂を。動るの辯者。さるぬうって。平
相國を。ぬ名者り。密に朱鞠卿を配所に。殺し。剰俊寛僧都の
帰洛を阻く。此度嶋ぬく。夫りうんと。汁被るを。ぬれ理を。揭して。ぬれ
を禁め。僧都の恙ぬく。とる母配所にめり。ぬるぬくぬもちとせま
母しくやひるのぐ。いかりうるくて。強止せしぐ。可惜烈女を殺さぞ。平
意ぬる。経房が。悪棍ぬれが。てふく僧都の役に。殺せんと。

をりく。彼が後者を遠離し。とれ侍の情あり。主君よ悪をまさぬ
らく。係車をとゞ叙しよあらうにと。ゐる墓安がす忠あり。と覆示せど。
主従さくい。とうち点ぜ感涙　さめめくざりる。案の前ハ息の下ゑ。
墓安を伏洋。こが良人大赦まりんとうとも。恙ゐ〳〵嶋ふやちと。
告ゆハをる一言ハ。吾智識の引導あり。ゆく成仏ゆちぐりてんやよ
徳壽。母が難波を叙せ〳〵。追捕もいく忽ゐ〳〵。あん弟八千弦
ハ十　こりひく。大人しゆうなりゐくが。蛾王をゐく鬼畏とゆうへ。
渡りく憂こを紡ゐ。舷ゐを女子のゐれがようや洛ふ残るとも。
六波羅より拷索こ。叙さんとまぞんゐ。安良子ゑゑ勦ゆてよ。
船の往来ゐる荒磯ふ。三年が間さそひく。二人ゆ中ゑ只一人
遺されゐ父ゆ。ぞそ墓ゐくゐりあいめ。顕身の息の肉ゑ。今

一トしびのゆふうゆ。吊ふ絶つゐ為ふ。過七の追薦をゑ。四十九箇
日果ゐゆぐ。塊魄屋棟を離ゐと。世ゆいふゆゐ魂ハ海ゆ渡
ゆでゆゐ。ゐゐ。瀬ぞゐ荒海を。渡りく鬼の名ゆ夏ふ。鬼畏
嶋ふゆりとゐれ。ゆ世の養こと亡母を。墓ふくいとも長旅ゑ。疲労
たりとも名ゆ去ゐね。荒磯ゑ逐ひく虚こと。可惜光陰をゐ〳〵ゆ。
いふゆ。ゐゐゐゆふゐれのこ。いざ墓安どゆ。ゐゐ首を刎く。相国ゑ。進ゐ〳〵
ゐゐ。といひ果こ。双を枝ゆ真赤の鮮血ふ浸を黒髪ゑ。白き虜ゆ
青さゑこ。黄ゐる泉へゆりる。覚ゆいあくゆ同胞ハ。恐びゐねく呼び
泣。ゆ吾倅ハゆくゆふ過世ゆ〳〵去こ年の夏ハ養こふ生別を。
ゆこゆゐ春ハ母ゆ前ゑ。死別をる業因ハ昔ゆ例稀ゐゐゆ。いゑ一言
徳壽とゆ。鶴の前とゆ多びくゐ。ゐ嘯こと左右ゐり。空殿を揺

肥見者を
殺し
基安首級を
持て帰る

動く。口説が安良子も。友音ふぞ啼群鳥。求食もいとぶ浅はしく。栄枯得喪面のうち。槐安國の夢の迹蛾王が牙ぞ思せる丹左衛門の声を励し。殺るる悲難ふ時を移しく。難波が殺者ゆり来うらべ。蛾王一人よく防んや。人あるゝまざる間ふ。鶴の前と徳壽丸を扶掖さ。ゝゝの処を立退う。これ又案の前の首をゝ提て洛ふ移り。難波が撃ま一縁故を。審ふ出えめげ。首級実検ぶふ果るべ。屍ハ葬るゝ。うん。もげも濤晴るゆうゝ。といひ諭しつ刀を抜く。打落を母の首ふ。携ふ出ゝ逃じと泣同胞を引留る。蛾王も安良子も。是を一世の別と思へが。ゝゝ嘆くるを。見るゝ。もせど基安ハ。双を押げて鞘ふ納め。袿の袖ふ押包む。その死顔と泣負と。肖しる親子の離若哀別。世を宇治川の水ゆゝで逝ゝゆゝ冥土の旅と鬼

畏へ渡る憂旅の。首途をゝ急ぐ。基安みづゝ馬ゝ牽ゝ。首級を鞍ふ結ひ著く。ゝゝうち跨ゝ。おしもめれ。逆ふ出ゝ行者ふ。新人ゝ出るゝと。丹左衛門が駒まれが蛾王ハ安良子ゝ。とも基安ふ言語ハるゝ。告別。泣沉ゝる同胞の主の手を引ゝ。かるゝ。河原ふそゝゝ現ゝ出ゝ。

俊寛僧都嶋物語卷之三終